

# イミディアット・メソッド概説<sup>1</sup>

池澤明子

## 1. イミディアット・メソッドの基本的な特徴

イミディアット・メソッドを一言で説明すると、「学習者と教師が、教室で、自分自身のアイデンティティを保持して、一対一で話すための仕掛け」であるといえます。その仕掛けの具体的なものが、「質問」「答え」「反応」を構成する会話文と系統立った語彙で構成されたチャート式の教材、および授業運営法などです。

イミディアット・メソッドは、学習者に教室以外で目標言語を使用する環境がなく、学習者の授業活動参加意欲が低い環境で考案され、様々な背景を持つ教師が、比較的容易に習得し、現場の事情に柔軟に対応させて実践して来ました。

このメソッドは会話の教育、それも主に初級を対象とするものです。中級以上にも適用できますが、イミディアット・メソッドが対応を目指す問題点は中級以上では解決していることが多いので、イミディアット・メソッドの仕掛けとそれから生み出される効果を部分的に活用するということになるでしょう。また、これ一つで目標言語の総合的な能力を養うための訓練ができるという方法ではありません。しかし、文法などの他の授業や、現在でも広く一般に行われている文法訳読法や文型積み上げ式と対立せず、**組み合わせやすい**という利点があります。例えば、文法の授業で扱う文型を使って「会話プリント」を作成し、それで会話訓練をするなどのことが可能です。それだけでなく、他の方法や授業活動と相補的な関係を築き得るものであり、これまでそのように実践され、普及して来ました。

理想的な教育/学習環境の条件を、学習者・教師・環境と、属するところに分類して挙げてみると、例えば、学習者は、基本的な学習能力と高い学習動機、明確で具体的な目標を持っていて、規則的・継続的に授業に出席し、自宅学習も行う。また、日常的に目標言語を使用する環境にある。教師は、いずれもが高い教育能力と目標言語運用能力を備えていて、熱意と向上心を持ち、授業準備や教育能力向上に時間をかけられる状況にある。しかも、チーム・ティーチングをする教師間に、緊密でスムーズな連携がある。環境では、豊富な物的リソース（教材、教具、パソコン、視聴覚機器など）と人的リソース（ティーチング・アシスタント、目標言語母語話者のゲストなど）に恵まれ、十分な時間数と明確なカリキュラムがあり、クラスは少人数で、学習者の既習レベルや学習能力は均質、といった条件が挙げられます。

このように、好条件が揃った理想的な現場では、理想的な授業を目指して、どんな方法でも導入でき、授業を円滑に運営することができるでしょう。しかし、このような現場は稀です。理想的な授業とは、教師なら誰しも目指すところですが、現場の条件は変えられません。授業改善は、その条件下で成立する方法を求めなければなりません。また、「理想

<sup>1</sup> 本稿は、「イミディアット・アプローチ概説」(2004)に加筆修正を行ったものである。

的な授業」の実現のために、授業方法の大きな枠組み自体を抜本的に変更することが必要な場合がありますが、それは多くの現場では非常に困難を伴うことであり、しばしば不可能なことですらあります。

イミディアット・メソッドは、先に挙げたような条件のいずれか、または殆どが欠けるような環境で、現場の授業方法の大きな枠組みを変更することなく適用できる、現実的な方法であることを目指しています。しかし、現在の授業より「マジ」であることのみを目指しているわけではなく、理想に近いものに到達することを目指しており、その可能性を充分持っていると期待されています。

## 2. イミディアット・メソッドの沿革

イミディアット・メソッドは、1995年から1999年にかけて、当時大阪大学のフランス語講師であったAzraが考案し、最初の形をまとめました。考案にあたっては、それ以前より同大学でフランス語講師を務めていたBenoitが個人的に行って来た方法と理念を参考にしました。

考案の目的は、1クラスの学習者が最高70人という大人数であることと、**学習者の授業活動参加意欲が非常に低い**という条件の中で、会話授業を円滑に運営することでした。大学の教養課程の必須科目である第二外国語でフランス語を選択した学生の多くは、実用目的ではなく、進級・卒業に必要な単位を取ることが目的で授業に出席しており、フランス語を使用する環境にもいなければ、その必要にも迫られていませんでした。加えて、日本の学校では一般的な学生の行動形態（質問をされても答えない、学生同士で会話の練習をしない、など）が、授業の運営を困難にしていました。

このため、Azraは、まずは授業を「フランス語学習の場」ではなく「**フランス語体験の場**」と位置づけ、大人数でも「体験」を可能にする仕掛けを洗練させて行きました。「体験」とは、学習者が教師と一対一（あるいは3人で）自分自身のアイデンティティーを保持してフランス語で「会話」することであり、これを授業の目標としました。「体験」を成立させるために、**チャート式の質問と答えで構成されたプリント教材**を用意しました。そして、効率的に大人数の学習者と「会話」していき、同時に学習者の授業活動参加意欲を刺激していく目的で、**出席表のシステム**を考案しました。

以上の成果をAzraとVannieuwenhuysenがまとめ、イミディアット・メソッドによる最初のフランス語初級会話教科書と教師用指導書が1999年に出版されました。以後、日本のフランス語教育現場にこの方法は徐々に普及しています。

その1999年から、イミディアット・メソッドの他言語への適用も始まりました。まず、池澤が日本語教育への適用を始め、Azraと共同で作成した教材を2冊出版しています。また、大阪大学のドイツ語教師Vögelも、イミディアット・メソッドによる授業を実施、やはりAzraと共同で作成した教材をまとめて出版しています。英語教育の分野では、高等教育においてだけでなく、中等教育でも活発に適用され、2004年と2006年にそれぞれのための教材が出版されています。

教科書以外では、ニュースレターが発行され、主にフランス語教師を対象に最新の情報を無料で提供しています。また、メソッドに関する情報や授業風景の映像を公開するインターネット・サイトも運営されています。研究発表、情報交換の機会としては、2001年より毎年研究会（日本語名称は「会話教育研究会」）が開催され、技能習得の機会としては、教材作成ワークショップが日本の各地で開催されています。

実践の積み重ねと複数の言語への適用の成果を取り入れながら、メソッド自体もその提案方法も発展を続けています。

なお、メソッドのフランス語名称は考案当初より *La Méthode Immédiate* でしたが、日本語名称は2005年に「イミディアット・アプローチ」から「イミディアット・メソッド」に改称されました。英語では、*The Immediate Method* です。

### 3. イミディアット・メソッドの目的と方法

イミディアット・メソッドの目的と方法に関しては、既にいくつかの文献がありますが、適用する言語と地域が違い、情報提供の対象が異なれば、情報の内容も異なって来ます。また、メソッド自体も常に発展しています。そこで、ここでは2006年現在、筆者がイミディアット・メソッドの基本的な枠組みと考えるものを抽出して示すことにします。

まず、イミディアット・メソッドは、以下のことを目的としています。

#### <イミディアット・メソッドの目的>

初級会話授業を円滑に機能させ、学習者全員に目標言語使用体験を与えること。特に、学習者数が多い、学習者間のレベル差・能力差が大きい、学習者が教室以外で目標言語を使用する機会がない、学習目的が実用目的でない、などの条件によって、学習者の授業活動参加意欲を刺激するのが困難な環境で、それを可能にすること。

ただし、学習者が少人数で、その背景が一定であり、学習意欲も旺盛であるというような現場で、イミディアット・メソッドが機能しないというわけではありません。そのような現場でも、イミディアット・メソッドを有効に利用することはできます。ただ、イミディアット・メソッドが対応を目指す問題点が既に解決している現場では、このメソッド以外の方法でも円滑に授業が運営できるでしょう。

次に、イミディアット・メソッドがその目的のために提案する方法の特徴は以下です。

#### <イミディアット・メソッドが提案する方法の特徴>

「会話の練習」でなく、「会話の本番」の実現：学習者全員が教師と一対一で、自分自身のアイデンティティーを保持して「会話」する機会をできるだけ多く持つようにする。

イミディアット・メソッドが学習者に提供する目標言語使用体験は、学習者が自分自身のアイデンティティーを保持したままで、教室において「今ここで」の会話をするこ

す（それを以下、「**会話**」と表現します）。それは、ペア・ワークやグループ・ワークとして他の学習者を相手になされることもあります。特に教師を相手に一対一でなされる機会を持つことを重視しています（クラスの状況に応じて、学習者二人と教師で「会話」する場合もあります）。

メソッドは、「会話能力の育成には、会話そのものを体験することが妥当な方法である」という理念にも基づいていますが、特に教師と「会話」することを重視するのは、教師が学習者より目標言語の運用能力に優れているからだけではなく、学習者の授業活動参加意欲を刺激し、達成感を与えるためでもあります。このことは、授業の円滑な運営という結果にもつながります。

イミディアット・メソッドは具体的な内容として以下の2点を提供しています。

#### <イミディアット・メソッドが提供する具体的な内容>

- |   |
|---|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. 教材作成法</li><li>2. 授業運営法</li></ol> |
|---|

授業にあたって必要な物は、以下の3点ですが、基本的に必要なものは1のみで、2および3は現場の条件に応じて、あれば授業の円滑な機能を助けるものです。それぞれ教師の裁量で作成することもできますし、あれば既製のものを使用することもできます。

#### <イミディアット・メソッドによる授業に必要な物>

- |  |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"><li>1. <b>会話プリント</b>：基本的に必要</li><li>2. <b>語彙プリント</b>：現場の条件に応じて、あれば授業の円滑な機能を助ける</li><li>3. <b>出席表</b>：現場の条件に応じて、あれば授業の円滑な機能を助ける</li></ol> |
|--|

「**会話プリント**」は、**チャート式の文型図**で示された「**質問**」文と「**答え**」文、「**答え**」に対する「**反応**」文が主要な構成要素です。「教師も学習者も、これをたどって話せば、ひとつの話題に基づいた、短いやりとりが、自分自身のアイデンティティーを保ったままできる」というように作成します。文型図には、当該の話題について話すための**系統立った語彙や表現**を組み込み、できるだけプリントから各自、自分の言いたいことが探せるように作ります。これにより、**暗記の完成度に左右されずに「会話」**することが可能となります。イミディアット・メソッドは、「暗記しなければ話せない」という完璧主義には基づいていません。

「**語彙プリント**」は、「**会話プリント**」の語彙や会話文の翻訳が主要な構成要素で、「**会話プリント**」の円滑な理解を助け、ひいては授業の円滑な機能を助けます。「**語彙プリント**」を使用しない場合とは、例えば、教師が他の学習者と「**会話**」している間、学習者同士で

「会話」しないため、あるいは極端な大人数クラス（例えば 30 人以上など）で教師と「会話」するまでの待ち時間が長い場合、「会話プリント」の内容理解の課題を学習者に与え、自習させるというような場合です。

いずれのプリントも片面 1 枚で完結、独立するように作ります。これは「積み上げ式」によらずに、それぞれの授業をなるべくその時のみで成立させるためです。

「出席表」の第一の目的は、授業管理です。教師が個々の学習者といつ、何度「会話」したかという情報を記入して行き、常にどの学習者と優先的に「会話」するべきかを把握するためです。第二の目的は、学習者管理です。学習者の授業活動参加意欲が低く、教育機関の制度が許す場合には、出席表のチェック項目（出席、遅刻、教師との「会話」の回数と点数、など）で平常点を出し、最終評価に加える、または最終評価とすることとします。これにより、学習者の授業活動参加意欲を刺激し、円滑な授業の運営を目指します。また、学習者の自主性を促すため、「出席表」の管理は学習者が各自で行うことを原則とします。少人数で、学習者の授業活動参加意欲がある程度保証されている現場（例えば、語学学校など）では、「出席表」は必ずしも必要ではありません。

#### <イミディアット・メソッドによる授業の構成>

- |            |                          |
|------------|--------------------------|
| 1. 「会話」の準備 | : 必要に応じて、会話で必要となる基礎事項を学ぶ |
| 2. 「会話」    | : 学習者と教師、学習者同士が一对一で話す    |

授業は大きく分けて、2部構成です。まず、1の「会話」の準備で、授業の目的である「会話」を円滑に進めるために、新出語彙や表現の意味の確認、口慣らし練習、文法や会話に関わる文化的な事柄の確認、モデル会話のデモンストレーションなどを行います。大人数クラスで、教師と「会話」するための待ち時間が長い場合などには、「会話プリント」の理解と「会話」のための準備を自習やペア・ワークによってさせることもできます。また、連携する文法の授業などで、既に文法や語彙が習得済みの場合には、この過程は省略できます。一人の教師が担当する同じ授業を、奇数回は「会話の準備」、偶数回は「会話」というように交互で運営する方法もあります。

2の「会話」では、教師は学習者と一对一（原則）で数分以上の会話を行います。その間、他の学習者は、学習者同士で「会話」をするのが基本です。時間や学習者の事情に応じて、ペアを変えさせたり、自習させたりすることもできます。

以上の行程の所要時間は、内容のレベルやクラスの数にもよりますが、基本的には 15 分から 90 分です。授業時間などに応じて、1 回の授業でこの行程を複数回繰り返すこともできます。また、授業活動の一つとして、他の活動（ドリル練習、ロールプレイ、ゲーム、タスク活動、ビデオ視聴、作文、等々）とこれを組み合わせることもできます。

「会話」は、以下の三点を原則とします。

#### <「会話」の三原則>

1. 学習者も教師も自分自身のアイデンティティを保持して話す
2. 互いの個人的情報や知識、意見の交換をする  
(インフォメーション・ギャップがある)
3. 2人または3人までで行う

以上を成立させることは、「会話プリント」作成段階からの課題でもあります。

1、2はつまり、「場面や人物を教室の外に設定したシミュレーション練習(ロールプレイ)をしない」ということです。ただし、ティーム・ティーチングの一環で、文法中心の主教材に合わせた会話の授業にイミディアット・メソッドを用いる場合などには、扱うべき文法事項や文型によって、どうしても1や2が成立させられない時が出てきます。その場合には、「イミディアット・メソッドの仕掛け(教材や授業運営法)を利用してシミュレーション練習をする」こともたまにはいいでしょう。しかし、「学習者が自分自身のアイデンティティを保持して話す」ことはぎりぎりまで守られるべき原則です。

3の「会話」の形態ですが、一対一で教師と向き合うと、却って緊張して話せない学習者の場合など、教師と学習者二人という組み合わせが有効な場合もあります。また、活動形態の変化により、授業が新鮮になるという効果ももたらされることもあります。形態は、現場の条件により適宜変えることができます。

「会話」を行う際は、特に以下の4点について、教師だけでなく、学習者も充分意識して行うことが期待されています。教師は、それらを授業の初回から強調、指導し、意識化と実践を促していかなければなりません。

#### <「会話」の際、特に意識して行われるべき4点>

1. 「質問」と「答え」に終始せず、相手の「答え」に「反応」を返す。
2. 一方的に質問されるのではなく、相手にも(特に教師に)質問する。
3. コミュニケーション・ストラテジー(特に補償のストラテジー)を用いる。
4. 個々の習得レベルと興味に応じて「会話」を発展させる。

コミュニケーション・ストラテジーとは、例えば、「あいづち、言いよどみ、言い換え、代用語、ジェスチャー、聞き返し、相手への協力要請」の使用などです。そのうち「会話プリント」にまとめられるもの(「 はフランス語でどう言いますか」など)は、それを用意して、授業の初回から使用していき、あいづちなどは「会話プリント」の会話文に組み込んでいくことを提案しています。

この4点の意識化と実践は、より自然な会話を目指すためだけでなく、学習者に自由度を与え、各人が自分の習得レベルに応じた「会話」をすることを可能にし、ひいては授業活動参加意欲を刺激するとともに達成感を与えるためでもあります。運用力の低い学習者でも、「会話プリント」を目で追いながら話せば、最低限の「会話」の成立は保証されます。「会話プリント」の内容のレベルを超えている学習者にとっては、「会話プリント」は

「会話」のきっかけであり、自分のレベルに応じて、自由に話題を発展させることが期待されています。また、プリントを見ずに「会話」させるなど、具体的な負荷のかけ方も、クラスや学習者の事情に応じて調節できます。

成績評価の方法は、個々の教育現場の事情に合わせ、教師の自己裁量でできるように、原則は定めていません。しかし、「会話」に点数をつける方法や、「会話」、出席、自習の成果などに点をつけて最終評価を出す具体的な方法は提案されています。個々の活動などに点数をつける際は、出席表にそれらの点数を記入する欄を用意しておき、そこに教師が記入していきます。

イミディアット・メソッドは、適用言語を超えて、個々の教師が協力し合い、実践例と作成教材を共有することで発展して来ました。ご質問、ご提案、実践のご報告などは、いつでも歓迎されています（<http://www.almalang.com>）。

#### 参考文献

- Azra, J-L. ほか（2002）『言語文化共同研究プロジェクト 2001 外国語教授法としての“Méthode Immédiate”』大阪大学言語文化部・大阪大学大学院言語文化研究科
- Azra, J-L., M. Ikezawa, e. a.（2005）The Immediate Method, *Language learning for life: JALT2004 conference proceedings*, Tokyo: Japan Association for Language Teaching (appearing) [コンピュータファイル（光ディスク）]
- 池澤明子（2004）「イミディアット・アプローチによる日本語教育の方法研究」九州大学比較社会文化学府修士論文